FREE
For Students

hoshiii
星(ほし)しんぶん

#002
December 2018
www.hokusei-y-h.ed.jp

働く

働くってどういうこと？　働かないと生きていけない？
大人のみんなはどうやって職業決めたんだろう

LIFESTYLE

料理×デュエマ

飲食店経営とデュエマって
似てるのかも？ P3

REPORT

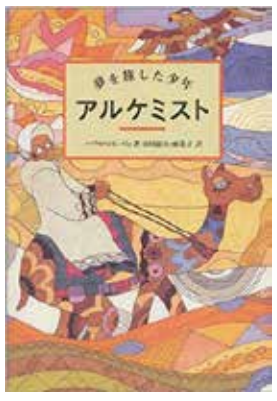
北星祭

保護者や地域の方、たくさんの
協力のもと無事終了しました P4

BOOK

何のために働く？

「何のために働く？」なんてちょっと厄介な質問。答えたくないかもしれないし、答えなんてないかもしれない。この本の一節に「おまえの宝物がある場所に、お前の心もある」というセリフがある。これは聖書に書かれているイエス・キリストの言葉 (マタイ6:19-21)で、自分が大切にしていること、いつも考えてしまうこと、たくさんの時間を費やしていること、そこに、自分の心があるのだ！ということ。僕たちは、どうやっても「自分の心」から逃れることはできない。心がなかったら楽なのに、というくらい辛い体験をした人もいるかもしれない。心は、夢/身体/言葉/気分など色々な方法で語りかけてくる。心って、五感と脳＝身体全部。つまり、自分自身のことだ。自分が自分に語りかけてくるなんてちょっと不思議だけど、「心の声」ってとっても大事だよね。何のために働いたっていい。それは自由だもの。でも、そこに＜心＝自分の宝＞があったほうが面白い。あなたの心は在り処はどこですか？

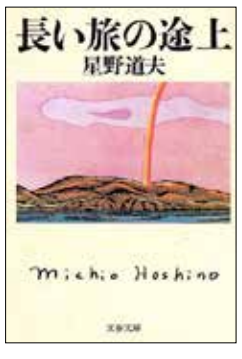


アルケミスト ～夢を旅した少年～
パウロ・コエーリョ / 山川紘矢＋山川亜希子 訳 / ¥2,600

BOOK

いつまで働く？

30代になって、気がついたことがある。それは、10年という時間の長さを実感したってこと。20代ではわからなかった。なんとなく10年の見通しができるようになり、10年単位で自分の人生を見通してみる。すると、「はて、いつまで働く？」と疑問が湧いてきた。星野道夫さん曰く「きっと、人はいつも、それぞれの光を捜し求める長い旅の途上なのだ」。彼は、周囲にだーれも人がいない広大なアラスカの大地に、光を探し求めた。その旅に終わりはないのかもしれない。

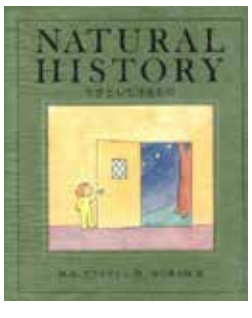


長い旅の途上
星野道夫 / 文春文庫 / ¥842

BOOK

誰のために働く？

さて、僕たちは1日8時間くらいは労働のために費やします。労働ってさ、自分が生み出す価値を人や社会/世界に還元すること。そうやって、僕たちは、自分を社会/世界と結びつけている。経済的な価値ってのは、時代や国、状況によって大きく変わる。人間が作り出す価値は不思議と「移ろいゆく」ものばかり。だから、それは自分自身の価値と同列に考える必要はない。僕は、この本の中にこれからの時代に必要な価値が隠されている気がしている。



NATURAL HISTORY
～生きとし生けるもの～
M.B.ゴフスタイン作 / 谷川俊太郎訳 / ジー・シー・プレス / ¥1,620

LETTER

20年前の僕へ。
働くってこと考える前にさ…

高校を卒業して20年が経ち、ふと君に手紙を書きたくなりました。宛先は、高校生の僕。言いたいことはたくさんあります。今回は〈問いの立て方〉について書きます。君が、大人なのかこどもなのかもよくわからない中途半端な扱いを受けながらも、まだまだ、しっかりこどもだってことはよくわかっています。社会なんてものをこれぽっちもわかっちゃいないし、知ってる社会といえば、〈学校社会〉。君の場合、これがまた息苦しくて、今考えてもあんなのよくわからない不必要なことの方が多かった。もしかしたら、〈大人の社会〉ってのもそんなのばかりだったりするのかもしれませんけどね……。さて、「問い」っていうのは、答えを引き出すための方法です。つまり、問い方を間違えると、自分の手に入れたい答えにたどり着くことができないってことです。でも、残念なことに、高校生の君は、問いの立て方をそもそも間違っています。まずは、この本を読んでください。答えを引き出す力〈質問力〉は、これから生きる上で力になります。

質問力
斎藤孝 / 筑摩書房 / ¥1,296

LIFESTYLE

堂々と、フラフラしています と答えています

文・写真 柴田英梨

高知県の馬路村の柚子畑で、柚子に囲まれながら柚子収穫の仕事をしています。しかしそれも11月末まで。それが終わったら、私は何も決まっていません。

こんな生活が始まったのは今から2年ほど前。私は今34才ですが、病気などのため、しっかり働き始めたのは30歳からでした。働く生活に慣れて2年くらい経った頃、「1年前と何も変わっていない……」と言いようのない不安に駆られ、地元の仕事を辞めて日本を放浪するようになりました。定職に就かず、様々な場所を転々とし、ほぼその日暮らしのような日々。去年からはラフティングガイドの仕事をするようになり、夏が終わると東南アジアを一人旅し、年末年始も海外で過ごしました。

今の私にとって働くことは、旅するための費用を稼ぐこと。同じ場所にいるとなんとなく気持ちが安定しないので、定住せず、仕事も決めず、フラフラ居場所を変えています。こうした生活に反感を買うことも、批判されることもありますが、実家から通って働いていた頃より明らかに生き生きしている。それに気付いた時、もうそれでいいんだ、と自分で納得でき、周りもあまり私を責めなくなりました。

そして今、高知県で柚子収穫の仕事をしています。どこにでも仕事はある。選ばなければどこでも働ける。足が悪い農家のおばあちゃんのお手伝いをして、柚子畑でパンケーキをごちそうになりながら、死んだじいちゃんの話を愛しそうに話すばあちゃんを心底から可愛いと思いながら、今この文を書いています。出会えて良かったなあ、来年もまた来たいなあ、と思いながら。

フラフラしていると、その土地に定住して働いている人たちと出会います。土地土地で働き方が全然違うのも分かる。県民性や、その地域のしきたり、食べ物や飲み物がある。その中で毎回新鮮に働ける今のフラフラ生活に満足しています。郷に入ったら郷に従えで、正解なんて何もなかったんだなぁと実感します。

日本で出会った外国人は、2ヵ月以上休みを取って旅をしている人も多く「なぜ日本人はそんなに働くのか？」とよく聞かれます。最初はちょっとしたカルチャーショックでした。海外で出会った長期間旅をしている日本人旅行者の多くは、仕事を辞めているか、季節労働をしている人でした。お金がなくなったら日本に帰って仕事をするという、定職についていない人たち。その違いを考えると、日本は「同じ場所で同じ仕事をする」ことが当然で、長い休暇はなく、遠くへ行きたい場合は仕事を辞めるか、定職に就かないかという選択しかないことが分かります。そして、長期間旅をしている人の多くは、日本の社会ではあまり良く思われないように感じます。

でも、私が旅をしていて出会った人たちはみな素敵な人ばかり。この人たちに出会っていなければ、今の私、今の生活、今の居場所はないな、と思う出会いが数多くあります。そこに感謝と誇りを感じています。

どこに行っても「普段は何をしてるの？」と聞かれますが、どう答えたらいいか分かりません。いつも困ってしまう質問ですが、堂々と「決まってません、フラフラしてます」と答えています。何者でもない自分に少し考えることもありますが、それで生きていける自分に少し力強さも感じます。

何者でもなくても、自分が納得できればそれでいい。柚子畑でそんな風に思う、今日このごろです。

柴田英梨 ¦ Eri Shibata

岐阜出身。なのにほとんど岐阜にいない。スナフキンみたいにギター持って各地を点々としてます。夏のラフティングガイド以外は、仕事決めてません。秋は大体、大好きな高知に戻り鰹してます。お酒大好き。

LIFESTYLE

はたらくこと

文・写真 三浦宗一郎

「働く」という言葉に、多くの人が嫌な気持ちになるのではないだろうか。まだ働いたことのない若者も、社会人として働いている大人も、だ。間違いなく18歳の時の私は、そうだった。

愛知県の高校を卒業し自動車工場に就職した。いわゆるライン作業で、毎日同じ車に同じ部品をつけ続けるという仕事だ。夜勤もあり、決して楽とは言えない仕事。朝は起きたくないし、夜は寝たくないし、月曜日がやってくるのが憂鬱だった。週末だけを楽しみに働いた。相談しようと思っても周りもそんな感じだったから、相談してもしょうがないと思っていた。「仕事は楽しくないもんだ」と、自分自身を納得させることで毎日を乗り切った。

そんな私の毎日を大きく変えるキッカケとなる出逢いがあった。その方は、ずっと夢であった飲食店の開店資金を貯めるために沖縄から3ヵ月間だけ、私の職場で働いていた。そして、私と同じ仕事を非常に楽しそうにしていた。鼻歌を歌いながら、笑顔で働いていた。私はその方に質問をした。「この仕事って、楽しい仕事なんですか？」その方は笑顔でこう答えた。「この仕事が楽しいかはわからない。でも、どうせやるなら楽しみたいんよ」。衝撃的だった。私は「仕事」を「つまらないこと」だと決めつけて働いていた。その仕事を楽しもうとする姿勢が全くなかったのだ。

その日から、私はその仕事を楽しむことに全力を尽くした。大きな声で挨拶をして、積極的にコミュニケーションをとった。少しでも早く仕事ができるように工夫をした。周りを楽しませられるように自分が楽しんだ。その日から、人生は明らかに変わった。仕事は変わっていない。自分が変わったんだ。

あれから3年経ち、私は転職し昔からの夢であった「人に関わる仕事」をさせてもらっている。仕事の中にも楽しくなさそうなことは沢山ある。でも、見方を変えるだけで、楽しくなるから不思議だ。「社会は厳しいぞ」って、働くことの大変さを教えてくれる人は沢山いる。「社会は楽しいぞ」って、働くことの喜びや、素晴らしさを教えてくれる人が増えたらもっと素敵だ、と思う。“はたらく”って、“はた（側）”を“らく（楽）”にするという言葉が語源だと聞いた。本当かはわからないけど、その通りだと思う。全ての仕事は、誰かを幸せにするためにあると思う。“はたらくこと”は、最高だ。

三浦宗一郎 ¦ Soichiro Miura

旅とサウナとカメラが好きです。
人の人生に熱狂する22歳。

BOOK

就職について考え過ぎたら

進学や就職を意識すると、突然難しい本を読み始めたりするもの。まずは力まないところから。就職について悩んだり考え込んだりしたときにはこの本をオススメします。

板尾創路さんやピエール瀧さんとの対談に天久聖一さんが遅刻するあたりからグッと引き込まれます。最後には矢沢永吉さんも登場。

ページに散りばめられた、働くことに関わる128の言葉を読むだけでも楽しい。「幼稚園のころからやってたこと、まだやってる。」というさくらももこさんの言葉が印象に残りました。僕もそうだなと。そう、就職したら急に大人になる訳でも、人生が変わる訳でもないんですよね。

新装版-ほぼ日の就職論 はたらきたい。

ほぼ日刊イトイ新聞 著・編集
東京糸井重里事務所 / ¥1,404

お便りお待ちしています

星しんぶんへのご意見・ご感想、質問をお聞かせください。
nyushi@hokusei-y-h.ed.jp お便りお待ちしています。

とおるちゃんに きいてみよう

Q どうして働くんですか？

A 6時起床。6時半に乗車し1時間半かけて余市に通勤。帰宅は早くて21時。早く帰ることもあるけれど、気が休まらず、結局家でメールの返信。落ち着いたら寝る時間。週末は教育相談会。月の休日は拳を握れれば良い方。収入は人並みより少し多いけれど、自分の時間が欲しい。やってみたいことが山ほどある。自分の時間を過ごしている人を羨ましく思う。30代に入る頃に北星余市の存続問題が学園内で話題となり、気がつけば30代は終わっていた。存続のために色々と前例がないことに挑戦し続けて10年。

ダメなところもたくさんある学校だけど、北星余市高校の教育があるから救われる人がいる、存続を願っている人がいる、学校の存在が生活の糧になっている人がいる。だから僕はそういう30代を過ごした。色んな人にとって大事なこの場所の存在を守るために。でも「そこまでしなくていいんじゃない?」と色んな人に言われてもきた。確かに。17時を過ぎたら帰っていいし、週末には休む権利がある。通常業務をこなせば義務は果たしているし、「そこまで」したからと言って給与が増えるわけでもないし。でも、北星余市を存続させるためには必要だったと思う。

この10年間を振り返って、これをすればとか、あれをしなければという後悔はある。宝くじが当たってたら……と無い物ねだりをすることもある。だけど、北星余市の存続のために行動して、難しいと言われてきた3年間の存続条件のうち2年を乗り越えて今があるし、色んなことがあったけれど何より自分が自分にとって正しいと信じて歩んできた過去がある。

お金を稼ぐことと働くことはイコールじゃないし、職業に付いているからって働いているってこととイコールでもない気がする。家事や子育てをし家族の平和や幸せを護ろうとしている専業主婦といわれる人だって、学ぶことに注力している人だって働いているんだろうと思う。自己犠牲が働くことでもないし、自己実現が働いていないわけでもない。

「どうして働くのか?」という問いに対する答えは、「何かのため」に「自分で選択して行動する」ってことになるかな。家族のため、自己実現、社会貢献、物欲を満たすため、理由は人によってさまざま。性格、能力、強み弱み、人脈、家庭環境、金銭的状況等があって、そうした要素の中で自分の求める「何かのため」に向かって自分の最適解を選んでいる。

「そんなことない!俺はやりたくないことをやらされている!」って人もいるかもしれないけれど、与えられた状況の中である目的のために最適解を自ら選んでいるんじゃないのかなって気がします。満員電車に揺られ上司に理不尽な扱いされ休みがなく切ない思いをしながらでも、家族を守るために頑張って働いている、とかね。

MATRON

日本全国、どこへだって迎えにいきますよ！

ボーディングハウス 寮母・大枝葉子さん

アパートのような佇まいの男子寮「ボーディングハウス」。寮母の大枝葉子さんは、余市高校のドキュメンタリー番組をみて「是非私もこの高校に関わりたい！」と放送の翌日には余市高校へ電話をかけ、約半年で寮の建築や準備を終え、2001年駆け足で生徒の受け入れを始めました。

大枝さんは生徒のことで何か気になることがあれば、すぐに学校の職員室に出向き先生と話合います。「長期休みや謹慎で地元から戻ってこない子がいたら、どんな場所にでも私が直接迎えにいきますよ！」と大枝さん。取材チームは大枝さんのパワフルな熱量に圧倒されてしまいました。

LETTER

マルセランとルネの本ありがとう。
違うものを持っていても親友なれるんだね。
似たもの同士よりも
違う人との方が仲良くなれるんだわ。
人から見たら変でもそれを乗り越えたら
こっちの勝ちだね。

マルセランとルネ

前号で紹介した本の感想をもらったよ。
まだ読んで無い人も、僕まで借りに来てね。（田中）

LIFESTYLE

11年前に卒業した私が なぜ、今母校で働いているのか

文 國久麻美 / 写真 辻田美穂子

2007年に北星余市を卒業して地元に戻った私は、スポーツトレーナーになるために専門学校に進学しました。しかし先生たちに不信感があり、たった2ヵ月ほどで退学。それからはフリーターとして様々な職業を経験しました。子どもが職業体験する施設、カフェ、居酒屋、学童や保育所など職種もバラバラ。恥ずかしいことに長続きしたことがなく、職を転々としました。この時期の私は「働く」という事に対してネガティブなイメージがあり、人間関係に疲れては仕事を辞め、何もせずに数ヵ月過ごし、元気になったらまた働きだすという日々を送っていました。

「働く」って良くも悪くも様々なことが付随してきます。どう受け止めるかは自分自身の問題。当時の私はそれを上手く受け止めて処理することができませんでした。友達に会社を紹介してもらい、やっと就職し落ち着いて来た頃、「ここまで頑張れたのは北星余市を卒業したという誇りがあるから」と改めて思い、数年前から心のどこかにあった「北星余市に恩返しがしたい！」という気持ちが大きくなっていました。タイミングとは凄いもので、当時担任だった今堀先生と食事をしていたら「今、事務なら募集しているよ」と、まさかのお言葉が返ってきたのです。迷う事なくすぐさま履歴書を送り、面接を受けに母校へと向かいました。その行動の早さにきっと周りはビックリしたと思います(笑)。

就職したばかりの会社に「北海道に行きたいので退職させて下さい」と頭を下げると「ずっと働きたいと思っていたのだから行ってきな」と言っていただき、働き出す1週間程前に採用の連絡が届いて、無事に母校で働くことになりました。

よく生徒に「どうして事務をやろうと思ったの？」と聞かれます。事務という仕事をするために北星余市に来たわけではありません。「北星余市で働きたい」という目的があり、教員免許を持っていない私は教師になることはできなかったので、その目的を果たすための手段が事務の仕事だったのです。職業は手段の一つに過ぎなくて、その職業に就くことが目的ではないと私は考えています。今まで経験してきた職業がバラバラだったのも、私自身が「この職業に就きたい」という考えではなく、大まかに言うと「人の喜ぶ顔が見たい」とか「人の為になることをしたい」という思いがあったから。目的が同じであれば職業は何でも良かったのです。「何になりたいか。どんな職業に就きたいか。」と考えるよりも「何を大事にして生きていきたいか。」ということを考えると「働く」って色んな可能性が広がっていると思います。

國久麻美 ¦ Asami Kunihisa
2007年に本校を卒業し、2015年から職員室事務として勤務。地元は東京だが、たまに帰省すると人の多さに疲れ、すぐに余市に帰りたくなる。バスケが好きで生徒に混じって一緒にやることも。最近ラーメンと入浴剤にハマりだしている。

LIFESTYLE

料理×デュエマ

自分の生きたい / 行きたい方へ向かうためのカードを集めて、最強のデッキを作りたい

文 石橋康廣 / 写真 辻田美穂子

料理人、石橋康廣です。

料理人と言っても、ホテルの料理長、寿司職人、レストランのオーナーシェフなど、環境によって現場でやることは様々です。僕は一人でお店をやっているので、料理はもちろん、お金の管理や接客など、大きなレストランでは数人が分担する仕事を全て一人でやっています。

全部一人でやる、その醍醐味

一人で全部って大変だと思われがちですが、実はめちゃくちゃ楽しいんですよ。最近、息子の影響でデュエルマスターズ（以下：デュエマ）というカードゲームにはまっていて、店の経営に役立っています。デュエマは、クリーチャーや呪文カードを組み合わせながら戦うゲーム。40枚1セットの「デッキ」を持って試合に臨みます。カードの組み合わせは自分次第、自由自在。少し視点を変えると、まるで自分の居酒屋の経営のように思えます。

居酒屋経営×デュエマ

僕が使っているデッキでいうと、初動はだいたい「ジョジョジョジョーカーズ」。僕の店では生ビール。席に着いたらまずは乾杯です（笑）。目玉商品はさしみの盛り合わせ500円。その日に市場で仕入れたものや、旬のものを日替わりで。うに、ヒラメ、かんぱち、牡蠣のコンボなんていう日もあります。正直、利益にならないですが、お客さんが「また来たい」と思ってくれれば嬉しいです。さしみ盛り合わせは「ジョットガンジョラゴン」。こいつがいれば僕のゲームは大丈夫、みたいな（笑）。お酒を卸してくれる酒屋さん、野菜や魚の仕入先である市場の方たちは僕の「パーリー騎士（ナイト）」。店のコンセプトに協力してくれたり、行き詰まった時に僕を支えてくれる存在です。こうしてひとつずつ自分で選びながら、今のデッキを作り上げました。このデッキには、「自ら狩猟で採ってきたものを提供できること」「漁師の経験から魚の知識が豊富にあること」、「マラソンで鍛えた健康な体のおかげで、一人でも営業が辛くないこと」という誰にも負けないカードが揃いつつあります。

少しだけでいい、視点を変えてみる

僕はデュエマで鍛えた「戦略」を自分の仕事に当てはめましたが、デュエマに限らず、今皆さんが夢中になっていることや、置かれている状況、そしてそれを乗り越えたという経験は、必ず将来役立つカードになります。例えば、運動部で培った体力。美術部で3年間絵を描き続ける集中力。生徒会で立てた企画をプレゼンする説得力。これから社会に出ていくと、勝手がわからず不安になったり、人間関係で悩んだりすることがあるかもしれません。そんな時は少しだけ視点を変えてみてください。自分の手持ちカードを思い出してください。社会の王道から一度外れてしまった僕にとっては、勝率が高いとされる「OTKジョーカーズ」よりも「赤ジョーカーズ」の方が性に合います。メインストリームではないけれど、これを使って結果を出したいし、できることを増やしながら、自分だけの最強デッキが組み上がっていく過程はワクワクします。今、僕の目の前にあるバトルゾーンは、自分のお店。皆さんも自分だけのデッキに自信と愛着を持って、社会というバトルゾーンで思う存分闘ってください。

石橋康廣 ¦ Yasuhiro Ishibashi
1986年生まれ。100万人に1人の男を目指すアルティメット料理人。札幌市北区で居酒屋「酔九屋」（つくもや）を経営。使用デッキは「赤白ゴゴゴブランド」

LIFESTYLE

僕の工作

文 村上智彦 / 写真 辻田美穂子

好きなことを仕事にすると大変だとか、仕事ってものは辛いものだとかよくきく。だけど、好きなことを真剣にやればやるほど、つらいことだとか面倒くさいことも含まれてくる。好きなことを仕事にしても、好きじゃないことを仕事にしても、結局のところ、どちらも同じじゃないかと僕は思う。どうせなら好きなことで悩みたい。

僕は工作が好きだ。小さな頃、工作に熱中して気がつくと何時間も経っていた。どうやったら大好きな工作を続けられるか真剣に考えた。大工になろうと思った。お金を稼ぎながら工作のスキルを身に付ける事が出来る。これはいい。

片っ端から工務店にアポを取って会いに行った。「明日からおいで」って言ってくれた工務店はお寺や神社を作る会社だった。そうやって僕はいわゆる宮大工になった。同期は工務店の2代目や宮大工に憧れて来たヤツばかり。僕は工作のスキルを上げるべく、必死で働いた。大工の仕事は思ってた以上に奥が深かった。江戸時代のお寺の修理に行ったり、三重塔のプロジェクトにも参加した。あちこちの現場で沢山の人と出会い、話をした。庭師に、瓦屋さんに、左官屋さん、建具屋さん。チームで作る喜びを知った。気がつくと同期は僕だけになっていた。

休みの日は友達のお店を作りに行き、工作にも打ち込んだ。パリのお鮨屋さんのカウンターを作りにも行った。雪で壊れたフェンスを直したり、犬小屋を作ったりもする。オランダで木工教室を開いたり、家にツリーハウスを建てたり。いつのまにか大工の仕事と工作の境界がなくなった。誰かの役に立てること。喜んでもらえること。ひとりでも作るし、みんなでも作る。考えたことを実際にかたちにできる。それが僕の工作。君の好きなことはなんだろうか。僕は工作が好き。いまも作り続けてる。

村上智彦 ¦ Tomohiko Murakami
1978年北海道恵庭市生まれ。Gen & Co.代表。関西を中心に社寺建築の世界に携わり、2012年から拠点を恵庭市に移し、社寺建築の伝統的な技術と知識、デザインを軸に大工、建築家、デザイナーという立場を行き来しながら幅広く活動している。

REPORT

1年生にとっては初めての、2年生にとっては今のクラスでは初めての、3年生にとっては最後の北星祭でした。そして、前期生徒会執行部にとっては大きな行事を行うのはこの北星祭が最後。夏休み前から考え、たくさんの出来事を乗り越えながらこの北星祭へ向けて準備するのは精神的にもキツかったと思います。でも、さすが生徒会、みんな悩みに悩み、踏ん張り、全校生徒が楽しめる北星祭にしたいという気持ちを忘れず準備に取り組みました。生徒会執行部のみんな、本当に本当にお疲れ様！ 最後までよくやりきりました。みんなの姿を見て何かを感じた後輩達が、きっといっぱいいたはずだよ。悩んだことも、涙したことも、決して無駄ではないのです。無駄なことなんて一つもないのです。

閉会式では、先生たちより合唱コンクールとクラス企画の総評と発表が行われました。どちらも3年A組が優秀賞をとりました。さすがは3年生ですね。そして、毎年恒例のPTAの方々が唄う「街」という歌。これを聞くとなんだかジ～ンときてしまうのは、何なのでしょうか。歌いながら涙を流している保護者の方もいて、その気持ちを想像したらこっちまで泣けてきました。北星余市に来るまでのたくさんの苦しさや、入学してからの事など、きっと色々な事を思い出していたのでしょう。素敵な歌声が心に響きました。歌が終わる頃、生徒へ届くようにとメッセージ付きの紙飛行機がステージ上から送られました。みんなが気がつかないところで想ってくれている人がいるんです。そのメッセージ、届いたかなぁ。

最後は生徒会執行部の挨拶。みんな全校生徒に向けて感謝の思いを伝えました。涙を堪えていた生徒も、今までの事を思い出し思わず涙する場面も。それにつられて他の執行部たちの目にも涙が。みんな頑張ってきたものね。一緒に悩み考え乗り越えてきたもんね。泣きたい時は泣いていいんだよ。みんな格好良かったよ。
一人ひとりの力や想いがいくつにも重なり、生徒、保護者それぞれが色々な事を感じた北星祭だったと思います。ここでは伝えきれないくらい、生徒達は大変な事があったでしょう。「いい北星祭にしたい」「楽しく迎えたい」という気持ちは同じはずなのに、イライラしたり、気持ちを上手く伝えられずやきもきしたり。でも、その分クラスの仲間の優しさを知り、それぞれの意外な一面を知り、今まで関わることのなかった人と話すようになり、クラスが自分にとってまた特別なものに感じられた人もいるかもしれませんね。本当にたくさんの方々のご協力のおかげで無事に北星祭を終えることができました。改めてこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

REPORT

あおぞら教室リポート

だるま森＋えりこがやってきた！

文　よいち子ども劇場

北星余市からだるま森公演共催のお誘いをいただき、子どもたちに生の舞台を観せられるということで、子ども劇場もお手伝いに関わらせていただくことになりました。

よいち子ども劇場では、人形劇・舞台劇・音楽などの鑑賞（例会）を、年に数回定期的に行なっています。今回公演のだるま森さんは全国子ども劇場例会の創造団体のひとつで、名前は知っていながらなかなか道内に呼ぶことができなかったので、子どもたちに観せるチャンスをいただけて本当に良かったです。子どもたちの夢中になって劇を観ている姿は、普段家では見られないような、また別のいい笑顔をしていました。公演終了後の感想を聞くと、子どもたちは「おもしろい人だった」「おもしろい楽器をさわれたよ」「ふしぎな人だった」「だるま森さんて宇宙人みたいな人だったよ」など子どもらしい感想が。お母さんたちからは「子どもが夢中で観てました。私も楽しかったです」「劇と音楽が一緒になって、違う世界に入ったみたいでした」「だるま森さんのしゃべりに癒されました～」など、たくさん感想をもらいました。この日もうひとつのお楽しみは、公演終了後のカレーライスのランチタイム♪大勢で食べるカレーライスは格別美味しかったです。この時もみんないい笑顔♪みんなおかわりもたくさんしてましたね。

よいち子ども劇場は、「すぐれた児童文化に接しながら、子どもたちの友情と自主性創造性を育み、真実を愛する豊かな人間性を培う」ことを目的とした会です。例会を観たり、遊びなどの自主活動の中で、子どもたちが心豊かに育ってくれることを願って活動しています。今回のだるま森公演も、参加した子どもたちが、何かひとつでも心に残ったものがあれば、と思っています。

REPORT

箕面市立多文化交流センター（大阪府箕面市）内のコミュニティカフェ commcafeで、10月28日から11月3日の期間、北星学園余市高等学校写真展「いまを、生きる」を開催しました。

会期中に写真展を訪れた方から、「“国際交流”協会で、どうして北星余市のことを？」という質問を受けることがありました。それに対する私なりの答えをここで書ければと思います。

私はマイノリティの視点を大切にした、街づくりやコミュニティづくりに興味があり、今の職場で仕事をするようになりました。センターを運営する、箕面市国際交流協会（以下、当協会）の役割には、日本語教室の運営や多言語での相談窓口の設置、情報発信、外国にルーツを持つ子どもたちの居場所づくりなどがあります。また地域に向けて在住外国人への理解を深めてもらう啓発活動も行なっています。「私たち」とはちがう人の存在を、その人の年齢や性別、国籍、言語、文化などでカテゴライズし判断するのではなく、その人自身を一人の人として捉え、尊重し認め合う場所です。当協会の求めることと、北星余市が実践していることは、実のところ大事な部分で繋がっているのです。

今の日本は、“生きづらい”と言われていますが、北星余市が現代社会の、物理的・精神的な拠り所になっているのは、その所以ではないでしょうか。北星余市を少しでも多くの人に知っていただきたく、そして、協会が大切だと考える多文化共生の視点、地域において違いを受け入れる場があることの重要性について地域の方々と一緒に考えたいと思い、今回この企画を立ち上げました。当協会や私個人が「誰かにとっての北星余市のような存在」でありたい、また、そうなるための努力を続けていきたいと思っています。

末原真紀 ¦ Maki Suehara
箕面市国際交流協会職員。在住外国人が日替りで自国の家庭料理を出すcommcafeにて様々な企画を行っている。関西クィア映画祭の実行委員もやってます。

2018年度教育講演会・相談会開催残りわずか！

教育講演・相談会では前半に北星余市高校の説明を中心に教育についてお話しし、残りの時間は本校教員が個別に相談をお受けします。お待ちいただく間は、PTAやPTAOB、会場によっては卒業生がみなさんとお話しいたします。お気軽にご参加ください。
※開催時間は全日程13:30～17:00です。

〈関東地区〉
2月16日 土　東京都　中野サンプラザ
3月10日 日　東京都　中野サンプラザ
〈中部・北陸・関西地区〉
2月　9日 土　大阪府　エル・おおさか
2月10日 日　愛知県　ウインクあいち
3月　9日 土　大阪府　エル・おおさか

学校見学を随時受け付けています

受験を考えるにあたって気になるのが実際の学校生活。北星余市高校では、日曜・祝日を除く9:00～17:00の間であれば、基本的にいつでも学校を見学いただけます（例外もありますので必ず事前にお電話でご確認ください）。冬休みなどの長期休暇や土曜日に見学いただいてもよいですが、見学するなら平日がお勧め。生徒たちの普段の様子が見えるからです。授業の様子、休み時間の過ごし方、寮や下宿での生活など、ありのままの姿をご覧ください。

ご希望の方は入試担当までご連絡ください
0135-23-2165（職員室直通）
nyushi@hokusei-y-h.ed.jp

編集後記

みんな当たり前のように働いているけれど、改めて「働く」ってなんだろう。きっと頭で考えただけでは分からないし、理屈でなんとかなるもんでもない気がする。ただ、自分が大切だと思う部分を大切に、そしてそれに対して責任は持っていたいなと思うのです。大人のみなさん、あなた達はなぜ働いているのですか？（國久麻美）

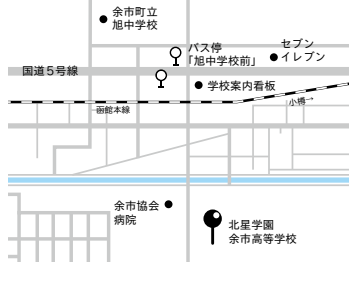
原稿を執筆くださった皆さんありがとうございました。前号よりも北星余市に近づけた気がしているのですがいかがでしょう？ とおるちゃんの部屋に意見箱を設置しました。生徒の皆さんからの意見・感想・質問をお待ちしています！ 保護者やOBの方々は tanaka@hokusei-y-h.ed.jpまで。（佐々木信）

hoshiii
ほし 星 しんぶん

発行日：2018年12月15日（土）
発行元：北星学園余市高等学校

北星学園余市高等学校
046-0003
北海道余市郡余市町黒川町19丁目2-1
Tel. 0135-23-2165（職員室）
Fax. 0135-22-6097（職員室）
www.hokusei-y-h.ed.jp

日々の学校生活の様子を更新しています
ブログ
北星余市はいま!

動画で観る北星余市
北星余市
Youtubeチャンネル

卒業生がいかに生きているか
ウェブマガジン
STAR RECORD